



目指すのは 「勝利至上主義からの脱却」

ファンルーツ、東京ヴェルディ1969普及コーチ 和賀 崇

強化や技術力向上を目指す選手の指導をする一方で、身体を動かす喜びを通してスポーツの楽しさを伝える場をつくり、子どもたちと一緒にサッカーを楽しむ。それぞれの目的のもとでコーチを務める和賀崇氏取材した。

コーチが楽しめ

笑顔で駆け回る子どもたちよりも、そんなわが子を心配そうに見守りながらも自身のプレーにエキサイトし始める親たちよりも、誰よりも大きな声が響く。

「あっちチームのコーチは脚を蹴っ飛ばしてもいいぞ。逆転するぞー！」

声の主は、(株)ファンルーツで子どもたちを対象にした複数のスクールや、クラブでコーチを務める和賀崇氏。もうすぐゴールデンウィークを迎える4月末、ポカポカ陽気の土曜日、駒澤屋内球技場で行われた親子フットサル教室のひとコマだ。

東京都生涯学習財団主催で行われるこの教室は6月までの隔週土曜日、計5回にわたり開催される。その第1回がこの日。集まっている子どもたちは小学校1～3年生で、一緒に来た友達や、お父さん、お母さん以外の人たちとどんなふうにコミュニケーションをとっていけばいいのか、少し戸惑いながら、周りを観察しながら教室が始まる。

「人間はいろいろですからね、すぐにコミュニケーションを上手にとれる子もいれば、なかなか自分から話しかけられない子もいるし、大人を困らせることで『僕はここにいるよ』と存在感を示そうとする子もいます。できるだけ同じ目線から、そういう感情を見極めてあげたいなと思って

います」

まず始まりに大切なのは、ここに來たすべての人たちが帰るときには「楽しかった」と思ってもらえるような環境を生み出すこと。そのためには、まず子どもより先にコーチが楽しむ。それが和賀氏が掲げるコーチングスタイルだ。

最初の雰囲気づくり

教室では基本的に子どもたちを学年ごとに分けて指導する。しかし、全体の人数を見回してみたところ、1年生、2年生に比べて3年生が少し少ない。そこで和賀氏から2年生に向けてひと言。

「俺は絶対3年生になんて負けないぞ！ っていう人、手を挙げて」

和賀氏の目の前で、2年生の男子が1人手を挙げる。

「偉い！ こういう積極的な選手は絶対うまくなるからな。ヨシ、3年生チームでやってみよう」

笑顔で声をかけながら、1つ上の学年グループに入る不安を取り除くだけでなく、スポーツをするうえで大切な「積極性」を示すことができたことを、みんなの前で誉める。嬉しそうに、3年生チームに移動していく男の子。その後も彼につられたのか、コーチの笑顔につられたのか、ほかにも数人の2年生が3年生チームへの参戦を表明し、親子フットサル教室が始まった。

和賀氏は1年生の子どもたちとその父母への指導を担当。まずはお互いのコミュニケーションを図ることを目的に、軽くランニングをしながら和賀氏の合図に合わせて手を叩く。「1、2、3、4」、徐々に数字が増え

■株式会社 ファンルーツ

活動拠点：東京都世田谷区、港区ほか
 実施スポーツ：サッカー、フットサル
 年会費：キッズインターナショナル（プレキンダー：3～4歳・4,000円/月、キンダー：4～6歳・5,500円/月、2,000円/年、入会金10,000円、ジュニア：6～9歳・6,500円/月、2,000円/年、入会金10,000円）、ママ&キッズサッカー教室（2～4歳・4,000円/月）
 ※入会金は、ウェア・パンツ・ストッキング・事務手数料が含まれ、年会費には、スポーツ傷害保険への加入料が含まれる。詳細はHP参照。

練習日：月～金 ※練習時間、曜日は各クラスによって異なる。HP参照。
 スタッフ：代表・平野淳、副代表・今井健策、営業企画・内山修一、総務・木本多美子、和賀崇、スクールコーチ・松坂達也、鈴木俊祐、菊池篤、南啓太、森満和仁、大森淳也、牧芳恵、家坂文子、モモエリヤゴウビ

指導方針：誰もがスポーツを楽しめるプログラムのプロデュースを通して、スポーツの楽しさを追求し、スポーツが根付く活動を広い視野で展開する

URL：http://funroots.net/

ていく。和賀氏の笛が鳴ったところで、手を叩いた回数と同じ人数のグループをつくる。たとえば「1、2、3、4、5」で「ピッ」と笛が鳴れば、つくるのは5人グループ。遠慮気味に動いていて、3人組しかつくれずに余ってしまったお母さんたち3人グループには、「ではみんなの前で自己紹介をお願いします」と和賀氏からの罰ゲーム(?)の指示が飛ぶ。恥ずかしそうに自己紹介をするお母さんたちに拍手を送り、5人組がつくれたその他の参加者たちも、改めて各グループで自己紹介をし合い、少しずつ場の雰囲気ながみ始める。

身体だけでなく、気持ちもほぐれたところでのよいよ準備運動が開始。2人組になって、ボールを使つての柔軟体操やストレッチをまずコーチが見本を実演して見せ、実際にやってもらおう。

「最近身体が硬い子どもたちが増えています。どれほど上手になることよりも、一番大切なのはケガをしないことです。この年代からしっかり柔軟体操はさせるようにして下さい」

笑顔を絶やすことのない指導のなかでも、しっかり伝えるべきことは父母に向けた言葉として伝えられる。「できる」、「できない」を問うのではなく、何を目的にして、今この動きに取り組んでいるのかを示す。限られた時間だからこそ、短い言葉で簡潔に。

「その場でうまくできなかったとしても、たとえばリフティングなんて『次の回までの宿題にしよう』と言えば、子どもたちは一生懸命取り組んでくれる。それで十分だと思います」

どこを対象にするか

ファンルーツでの教室指導だけで



子どもたちと一緒に自らが「一番楽しむ」と言う和賀氏

なく、東京ヴェルディでも普及コーチとして指導にあたる和賀氏。前者は「誰もが楽しめること」を第一に掲げているのに対し、後者は「強化」や「より上のレベルへ到達するための技術向上」がテーマになる。目的の違いはあるが、同じように会費を払って「サッカーを教えてほしい」と子どもたちが集まっていることに変わりはない。しかし、指導のなかでは微妙な違いがある。和賀氏は言う。「僕のなかには『上二割、下二割』という考え方があります。ファンルーツのように、みんなを楽しませることを目的としている場合は、対象になるのは“下二割”、ヴェルディはその反対で『うまくなりた』という子が集まっている集団においてはプログラム形成の中心になるのは“上二割”です」

10人集まっていたら10の個性があるように、実力差や意識も10個ある。もちろんそのすべてに対して応じてあげたいと思う。しかし、時間もコーチの人数も限られているなかでは容易なことではない。だからこそ、「この集団が何を指すか」という大きなテーマに基づいて、どこに焦点をあてるべきかを図る。

たとえばヴェルディに通う子どもたちへの指導では、10人いたら1～3番に上手な選手たちがチャレンジできるような、少し質の高いメニューを提示する。たとえそこでは「下二割」に位置しているとしても、ヴェルディのように「強化」を目的とした集団でプレーしたいと望む子どもたちの意思は、その程度では曲がらない。「もっと自分たちもうまくなりた」という思いから、自然と全体が質の高い練習へと向かっていくと言う。

逆にファンルーツの指導では、技術的には10人中8～10番の子たちが飽きずに取り組めて、その子どもたちが達成感を得られるプログラムを中心に組み立てる。最初はなかなかうまくいかなかったとしても、彼らができるようになってきたらみんなの前で彼らを誉める。「自分たちよりも下のレベルだなと思う子が誉められることで、真ん中より上にいる子どもたちには、自分たちも誉められている、できているんだと感じてほしい」。

もちろんここでも“上二割”にいる1番うまい子、その次に上手にできる子どもたちへのアプローチも別にある。「できてしまう彼らも飽きてし



①



②



③



④

和賀氏も参加者に混ざって自己紹介をして（写真①）、実技練習はやって見せる（写真②）。練習の合間には常に声をかけ（写真③）、全員に楽しんでもらうことが目的（写真④）

まわらないように、『ここまでできたなら、ちょっとこういうこともやってみようか』とほんのちょっとのプラスメニューを教えたり、みんなの動きを止めたなかで『ちょっとやってみて』と彼らの動きをみんなで見て、どこがいいか誉めてあげる、大したことはやっていないと謙遜しながらも、和賀氏の言うさまざまな工夫は、親子フットサル教室の随所でも発揮されている。

「蹴っちゃダメ」は3回目から

始めて1時間近くが経過し、和賀氏は「次はこれをやってみよう」と基本的なボールの扱いを身につけるためのプログラムへと移行した。コミュニケーションを図るための遊び感覚で行うプログラムから、身体をしっかりと使う柔軟体操やストレッチを経て、ようやくたどり着いたサッカーらしいプログラムに、嬉々とした表情で取り組む子どももいれば、少し飽き始めて親やコーチにちょっかいを出して絡み始める子どもも出てくる。

ボールを蹴るのではなく、コーチ

を蹴ったり、親を蹴ったり。つまらないわけではない。かまってほしい。駄々をこねることで、自分の存在を認識してほしい。子どもなりの精一杯のアピールをしている。本当はいけないのかもしれないけれど、という前置きの後、和賀氏は次のように言った。

「蹴ることや、言うことを聞かないということは悪いことですよね。それを教えてあげるのもコーチの役目だから、本当は最初から叱らなければいけないのかもしれませんが、でも僕は最初はそうしません」。

なぜか。

「初めから『お前何やってるんだよ、ダメだろ』と言ってしまったら、きっともう寄ってこないでしょうね。コミュニケーションを図るどころか、閉じてしまうと思います。だから最初は怒らない。でもそれが3回4回と続いたら、そこではしっかり怒る。誰だってきっと怒りたくないですよね。でもきちんと怒ることができなければ、子どもにとってははいてもいなくても変わらない、印象にないコーチにしかなれないと思います」

教室に通う子どもたちからしてみたら、「ここに行けばこのコーチに会える」と思われるような、何でも話せる“いいお兄さん”のような存在でありたいと思っている。でも、それだけでは選ばれるコーチにはなれない。

「“コーチ”なんて言っているけれど、教えるなんて偉そうに言えないですよね。子どもたちと一緒にサッカーを楽しんで、子どもたちからたくさんのことを教えてもらっている。学ぶことばかりです」

教室での指導中、和賀氏はコート内を所狭しと動き回り、子どもたちに声をかける。そのたび子どもたちは、緊張した面持ちではなく楽しそうな笑顔を見せる。そしてそれ以上に和賀氏が楽しそうに笑う姿が印象的だった。

勝つことだけが楽しさじゃない

和賀氏自身はいわゆるユースなどの“クラブ育ち”の選手ではない。中学・高校は学校の部活動でサッカーをして、大学では体育会のサッカー一部ではなく、東京都学生連盟三部

リーグに所属しているクラブチームでサッカーを楽しんだ。

勝てば楽しい。でも勝つばかりが楽しさではない。そんな学生クラブ生活のなかで一度だけ、「輝かききプレイヤー時代」と振り返る戦歴を記録した。正月の天皇杯出場権をかけた東京都予選を勝ち抜き、関東大会へと進出できるのは約60チームからわずか5チームしかない。当然和賀氏を含む誰しもが「三部のチームが一部のチームに勝てるはずがない」と思っていたにもかかわらず、なんとその5チームの1つに入るまで勝ち進んでしまった。「関東大会が初めての遠征だったから、東京から埼玉に行くだけでめちゃくちゃはしゃいでいました（笑）」。

無欲で臨んだ関東大会でも1勝を挙げる。最後は岡野雅行（現・浦和レッズ）選手などを擁する日本大学に「5-0で木々端みじんに負けた」と言うものの、今も、楽しく輝かしい思い出として和賀氏のなかに強く残っている。

大学を卒業後は宝石会社に就職した。「身体が一番動けるときに、サッカーから離れてしまった。あの頃も続けていたらすごい選手になっていたかもしれないなあと思う気持ちもありますね」と笑いながら振り返る“過去”に後悔はない。楽しみ方がいくつもあることを自身が知っているからだ。

だからこそいわゆる「勝利至上主義」、「何をしてでもとにかく勝ちさえすればいい」という考え方に異論を唱える。

「勝つことから学ぶことはもちろん大きいし、とても貴重なことだと思います。でも大切なのは、子どもたち、選手たちの力で彼らが“選んで”勝ったのか、それとも大人たちが“仕込んで”勝ったのか。その違い

がとても大きい」

大切なのは「どう勝ったのか」

小学生の大会を見ていると、ベンチで腕を組んで座りながら1つ1つのプレーに対して厳しい言葉で指示を出す大人たちの姿を目にする。

「子どもたちがね、1本シュートを打つたびにベンチを見て大人の顔色を確認しているんですよ。こんなに小さいうちから大人の顔色を窺う必要なんてないし、楽しくないだろうな、もったいないなと思ってしまいます」

今冬の全国高校サッカー選手権大会を制した野洲高校（滋賀県）のように、子どもたちが「自分たちが思い通りにプレーして勝った」と堂々と言い切れれば一番いいと思う。しかし「勝ちたい」ではなく「勝たなければいけない」という試合では、選手から自由を奪いがちで、見ている「面白い試合」にはなりにくい。諸外国のように地域に根づいた文化生成がまだできていない日本では、勝つことが1つの成果で、その結果に人が集まるということも存在する。しかし、何かが違う。

「チームが勝つことと同じように、個が育っていくことも1つの結果だと思います。広い目で見たら、1人1人が育たなければチームは育たないはずで、チームのレベルが上がらなければ戦術など組み立てられない。とくに育成年代と言われる世代への指導では、まず目指すのは“勝利”ではなく、個のレベルアップ。“勝利”や“優勝”だけを目標にして、それを叶えたからおしまい、『燃え尽きてしまいました』というのはもったいない。好きで始めたものなんだから、いつまでも好きであってほしい。そう思わせるような指導をしないといけないでしょうね」

学校単位の部活動のように、大きな大会がない分、クラブでの指導では何が結果なのか。明確なものは見えにくい。和賀氏自身も「試行錯誤を繰り返している」とその難しさを口にする。しかし、最近になって1つ感じられる成果があったと言う。

「大人になったらここに来て、『コーチみたいなコーチになりたい』って言ってもらえた。すごく嬉しかったし、それも1つの結果と言えるんじゃないのかなと思っています」

自分なりの結果をみつけない

子どもたちと同じ目線で楽しみ、一緒に喜び、笑う。子どもたちチームに混ざったゲームでも冒頭の「あっちのコーチは蹴っていい」発言のように、誰よりも大人げない姿を見せ、大きな声を出し続け、ボールを追いかける。

「自分にはこれができる自分だけ高めるとはではなく、自分がいなくてもあのコーチがいるという環境をつくりたいし、そういうコーチを育てていきたい」と言うように、これからは自身のコーチングの質の向上だけでなく、環境づくりにも目を向ける。長いビジョンでものを考えるのは苦手だと言いながら、今描く「いつか」を次のように語る。

「もっといいプレーができたかなと思って追求するのと同じように、もっといい接し方があったかなと追求し続けて、コレという決められた正解ではない自分なりの結果をみつけない」

1人のコーチとして、もっと先を目指し、もっと上を目指す。強化を目指すクラブがあって、普及を第一に掲げるクラブもある。目的が1つではないように、きっと指導者が得ることのできる結果も1つではないはずだ。（取材・文／田中夕子）